

崩れる大地

大自然の力が生み出す土砂

厳しい自然条件を反映して、北陸地方建設局の管内には、土石流、地すべり、急傾斜地の崩壊などによる土砂災害危険箇所が約15,000箇所も存在し、砂防指定地の面積は約1,400km²、地すべり防止区域の面積は約400km²に達し、それぞれ全国の17%、37%を占めています。

江戸時代末期の安政5(1858)年、立山連峰を襲った大地震は、常願寺川の源流部に大崩壊を引き起こしました。このとき山から崩れ出した土の量は4億1千万m³に達するといわれています。この大量の土砂は川の流れをせき止め、天然のダムをつくりだしました。やがて、そのダムが決壊したために、下流に土石流が押し寄せ、140人もの溺死者と2,500戸の流失家屋という大災害が発生しました。

また、姫川の上流にある稗田山も、明治44(1911)年に推定1億5千万m³の土砂が崩壊して、多数の死者を出しています。

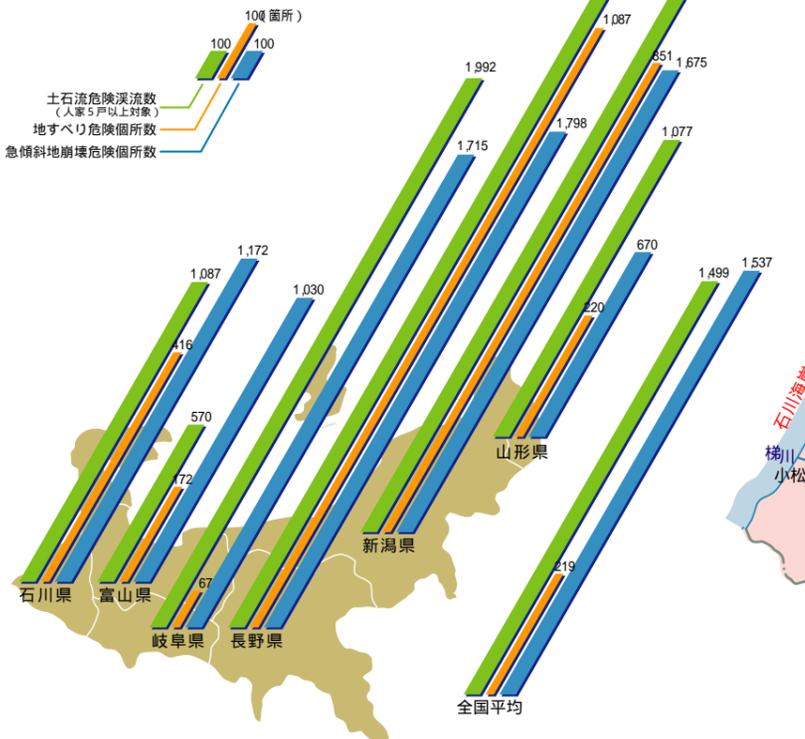


手取川水系基之助谷地区の地すべり



姫川水系支川浦川上流の稗田山の大崩壊地

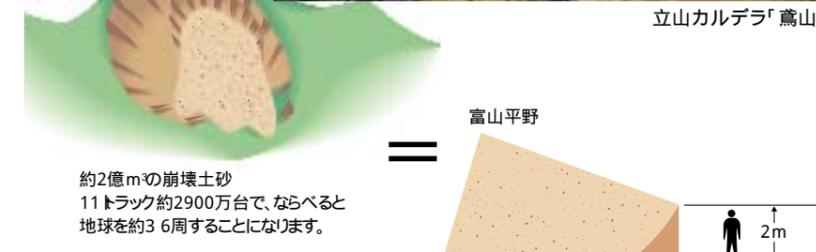
県別土砂災害危険箇所数



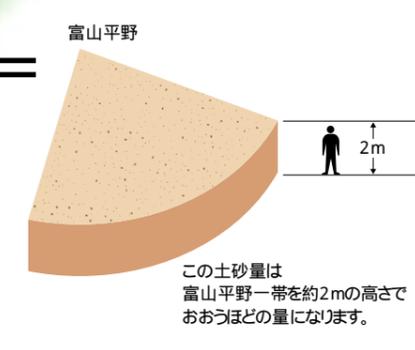
凡 例	
1級河川	
砂防区域	
海岸保全区域	



立山カルデラ「鷲山崩壊地」の内部



安政5(1858)年の地震などで崩れ落ちた鷲山の土砂を鷲泥というが、その総量は約4.1億m³と推定されています。立山カルデラ内には現在なお約2億m³の鷲泥が残っており、今も常願寺川へ流出し続けています。この残りの鷲泥は、富山平野全体を平均約2mの厚さでおおうほどの量になります。



今も残る約2億m³の崩壊土砂